
鬼の森

芙美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の森

【Nコード】

N2008W

【作者名】

芙美

【あらすじ】

人を寄せ付けない、鬼がいるという禍々しい森。冒険に来た少年と少女は、森の奥で祠を見つける。***10話くらいで完結の予定

1 祠

人里から離れた、草木が生い茂り陽の光が届かない薄暗い森の奥に、その祠はあった。

この森は、全体を禍々しさに覆われていた。森を歩くと、草も木もひっそりとした悪意を持ち、ふとした瞬間に襲い掛かってくるような不気味さで、行く手を遮る。

草木をかき分けてどうにか進んでいくと、突然開けた場所に出る。三メートル四方ほどの空間には短い草がまばらに生えていて、頭上を背の高い木が光を遮る為やはり薄暗い。

この中心に、祠が置かれていた。

祠の周辺は夏でもひんやりとして、空気が張り詰め、妖気が漂っているようであった。

祠は何年も何十年も、そこで誰かが来るのを待っていた。

*

祠に近づく、二つの影がある。

「さとるちゃん、見て！ なにかあるよ」

無邪気な子供が冒険に来たのだろうか、祠の前にはしゃいでいる。美咲、もういいだろ。帰ろうぜ」

さると呼ばれた少年はこの森の雰囲気には怯えていたが、美咲と呼ばれた少女は気にすることなく突き進んだ。さとるはしぶしぶついていく。

さとるは不安気に辺りを見ていた。美咲がいなかったら、全力で走り出していただろう。恐ろしさに叫んでしまいそうだったが、必死にこらえた。

息が苦しくなるほどの、押しつぶされるような重く静かすぎる空気。静かなのに誰かがいるような気配。少し気を緩めると、それら

が目に見える形で現れるような気がして、さとりは無意識のうちにこぶしを握っていた。

「ドアの前に紙が貼ってあるよ」

観音開きの戸がお札で封印されていたが、まだ小さい美咲はお札の存在を知らず、テープのようなものだと思った。しかし紙には何か書かれていて、それがただのテープではない特別なものだと感じとり、美咲の目はより一層輝いた。

「美咲、もう帰ろう。鬼が出る……。この森は鬼が出るんだって、みんな言ってただろ」

さとりは顔を青くして祠を見た。本当は見るのも恐ろしかったが、見ておかないと中から何か出てきそうで、目が逸らせない。

「早く帰ろう。ここ、普通じゃない」

震える声でつぶやいた。

さとりとは対照的に、美咲は日常と離れたこの場所に興奮きつて、引き返す様子がない。

「もうちょっと、見てみようよ。ちょっとだけ。私中を見てみたいなあ」

いつもの、わがままを押し通す笑顔に、さとりは何も言えなくなる。無言のさとりを、美咲は了解と受け取った。

美咲は周辺をうろつくと歩いた後、階段を上り戸の前に立った。どうにか中を覗こうとするが、真っ暗で見えそうにない。

やはり、封をやぶるしかない。

美咲はお札の前に手をかざした。札を取ろうというのだろう。

しかし、手はとまったままで、動かない。心の中で、封をとこうとする者と邪魔する者が戦っているような、緊張感が漂った。

さとりはどうにかして美咲を止めたいのに身動きができず、祈りながらただ見守った。

空気が、張り詰める。

やがて美咲は動きだし、無言のままお札を取った。

戸が開いたわけでもないのに、さとりは反射的にぎゅっと目を瞑

った。

あんなに固く戸を閉ざしていたお札は、たいして力もない美咲の手で簡単に剥がれてしまった。

お札がなくなり、これで中に入ることができる。それなのに、さつきまであんなにはしゃいでいた美咲が大人しい。

自分は何か取り返しのつかない、恐ろしいことをしてしまったのかも知れない。

漠然と、美咲は不安を感じていた。美咲はどちらかというと怖がりで、本当は森に入ってからずっと怖かったのに、何故あんなにはしゃいでいたのだろう。

「さとるちゃん、戸を開けよう」

美咲がさとるを呼び、さとるは青い顔をしたまま何も言わず美咲の傍まで来た。

二人は、恐る恐る戸を開けた。

2 咆哮

祠の中は外よりもなお暗い。

しかし見てみると、2畳程度の広さに腰の丈ほどの高さの装飾のついた台のようなものが置いてあるだけで、中を物色するほどのこともなかった。

考えていたような恐ろしい物はなかったが、そうとわかっても足を踏み入れる勇気が出ずに、二人は立ち尽くす。

先ほどから鳥肌がおさまらない。さとるは不吉な空気を肌で感じ、知らぬうちにこぶしを握り締める。

風が高い音を鳴らして、背後の森を揺らした。それは警笛のようであった。

さとるはこんな恐ろしい場所を早く抜け出したかったが、それには祠にはいつて、駄々をこねている美咲を満足させるしかないのだ。さとるは、覚悟を決めた。

「……はいるぞ」

美咲の返事も聞かずさとるは足を踏み出した。古い板がきしみ音を立てる。そんなことさえ飛び上るほど、さとるは恐ろしかった。

中は簡素であっても、押しつぶされそうな圧力を感じ、息苦しい。見えない大きな力が二人をつぶそうとしているようだ。

恐ろしいと思うのは気のせいだ、落ち着こう、そう意識しながらさとるは台に近寄り中をのぞいた。

これを見て、そうして美咲を引っ張って帰るんだ。

さとるは恐怖を押しこめて、早く帰ることだけを考えて動いた。入り口からは暗くてよく見えなかったが、台上に短剣が納められていた。剣は、祠の中で薄く光を放っているように見えた。

さとるは引き寄せられるように、短剣を手についた。短剣は軽く、さとるの手によくなじむ。

「さとるちゃん」

美咲がいつの間にか、台の裏側に回り込んでいた。しゃがんでいるのか姿が見えず、声だけが耳に届く。

「箱が置いてあるよ。隠してあるみたいだね。また紙が貼ってある」
美咲の声は無邪気だが、上ずっていて何か空々しい。
嫌な予感がして、さとするは止めようと近寄った。

しかし、もう遅い。

紙を破く音が、祠に響いた。

「美咲っ」

さとするが美咲を呼ぶのと同時に、箱が開かれた。

「きゃ」

美咲が小さく声をあげる。

箱を開くと、大きな風が起こり、祠が揺れた。

風と共に咆哮がどこから運ばれてくる。

小さな祠の中に風が渦巻いて、立つのがやっとだった。

さとするは目を開けられないほどの強風から体を守ろうと、必死に踏ん張った。本当は耳をふさぎたかった。咆哮に心臓が締め上げられているような状態で、今にも倒れてしまいそうだった。

どんどん咆哮の数が増し、さらに笑い声が重なり、嵐のように森がざわめく。なにか悪しき宴が始まるような様相であった。

さとするは風にあおられ、下を向いていた。何かが起こるという、恐ろしい予感に顔をあげられない。

「……もう、帰してくれ」

涙を流しながら、気が付くとそうこぼしていた。体の震えが止まらない。恐怖と緊張が体を支配している。

風が吹き荒れ、咆哮が大地を揺らす……まさに地獄のようだった。
「帰りたい」

下を向いたまま、涙を流して全てが収まるのを待った。

早く過ぎ去ることを、ただただ祈った。

ふいに風が止まったので目を開けると、肩がずしりと重くなった。反射的に目を横にやると、とてつもなく大きな顔がそこにはあった。

ぎょろりとした目が、さとるを見ている。

さとるは声もあげられないまま、それから目を逸らせずにいた。

『マズハ、オマエヲ、喰ヲオウ』

地の底から響くような声を聞き、さとるはそのまま気を失ってしまつた。

祠の日から時が経ち、さとるは何事もなく日常を送っている。

同じような毎日を送る中で、祠の出来事も記憶からなくなりつつあつた。

毎日さとるは掃除や風呂焚きなど、家の手伝いを熱心にやった。

それがさとるの仕事で、やらないと食事がもらえないのだ。

さとるの食事は毎食、苦い薬草のスープで、いつまでたつても味に慣れない。ないよりもまだと思いつながら飲むが、腹はいつも満たされず力が入らない。

それでも毎日必死になつて生きた。祠の出来事は記憶から薄れていても、生きていこうという強い気持ちでさとるの奥に密かに芽生えていた。

3 変わらない

『変わらない、あの日から何も変わっていない』

さとはは呪文のように毎日その言葉を口にした。

水を汲み、火を起こし、石を運び、薪を割っている間もずっとつぶやいていた。

「変わらない……何も、変わらない……」

突然さとは手を止めてうずくまり、それから急いで場所を移動して吐いたが、胃液しか出なかった。もう丸々一日、ご飯を食べていない。毎日こんな風だ。空腹のまま、倒れそうになりながら働いていた。

「やっと、全部、終わった」

仕事を終えたさとは道具を置いて、自分の食べる食事を作った。水に薬草を入れて、長時間煮込む。自分で作っているのだから好きなものを好きなだけ作る、というわけにはいかない。決まったものを決まった分量で作るように決められているのだ。それを破ると、恐ろしいお仕置きが科せられる。

黙っていても絶対に見破られる、さとははそう頑なに信じていた。さとはは大きな石に持たれながら、うつろな目で鍋が煮立つのを眺める。湯気が立ち上る様子を、さとはは見るともなく見ていた。

「あの日から何も変わらない…… 変わらない…… 変わらない……」

煮込み続けて、スープが出来上がった。

「変わらない…… 変わらない……」

さとははよろめきながら鍋に近づき、汚れた皿にスープをよそって、汚れたスプーンで口にした。

他の人間なら顔をしかめるような、青臭く味のないスープだったが、さとはは夢中で食べた。

腹を満たすような量があったわけではないが、スープを食べ終えたさとはさっぱりした表情をしている。

気分が良くなり、良いことも嫌なことも何もかも忘れてしまいうだった。事実、さとりは知らないが、この薬草にはそういう効果があった。

片付けまで終わると、日が暮れて辺りは真っ暗になっていた。遠くから誰かのなき声や咆哮が聞こえる。

恐怖に足をつかまれそうだったが、さとりは耳をふさいで全力で走った。

「変わらない……何も変わらない……」

夢中で走り、ようやくたどり着いた。

息を切らしてさとりは部屋にはいり、錠を下ろして寝転んだ。土がむき出しで肌寒かったが、疲れていたのですねすぐに眠ってしまった。

『ここは、どこだ』

さとりは木に囲まれた場所にいた。見たことがあるがわからない。しかし辺りを見渡すが、全く見当がつかず、立ち尽くす。

『……ちゃん。……ちゃん』

誰かを呼ぶ少女の声がこだまする。しかし、どこにも姿が見えない。

『誰だ』

さとの声は震えている。

『私は、美咲。あなたは、誰？』

『僕は……僕は……僕は、誰だ』

さとりは目を覚ますと、辺りを見渡した。壁と格子に囲まれた、いつもの部屋だった。鍵はまだ開いていない。

『僕は、誰だ』

両手を開き目の前にやる。手は汚れて黒くなっていた。

「僕は、誰だ……。僕は……。忘れなければ、忘れなければ。変わらない……。何も、変わらない」

さとりは震える声で、唱え続けた。

4 暗闇の声

錠が上げられる音がして、さとるは目を覚ました。

戸が開いている。一日の始まりだ。

さとるは今日も水を汲み、火を起こし、石を運び、薪を割る。

「変わらない…… 変わらない」

そして呪文のように、言葉を繰り返す。

確かにそれらはさとるにとっての日常になりつつあった。

「変わらない、変わらない」

しかし目を逸らしたままの日常が、続くわけがないのだ。

「変わら……」

『あなたは、誰？』

声が聞こえたような気がしたが、見てみてもさとるの周りには誰もいない。気のせいだ。

しかし、心臓が音をたててさとるを急かす。

思い出せ。

思い出すな。

忘れる。

思い出せ。

全て忘れてしまえ。

思い出せ。

『オマエヲ、クラウ』

「ひいつ」

さとるは手に持った石を放り、その場にしゃがみ込んで震えだした。

「ずっとずっと、何も変わっていない…… 変わらない、変わらない、変わらない、変わらない、変わらない」

空でカラスが鳴いた。それを合図にさとるはふらふらと立ち上がり、仕事を続けた。両目からとめどなく涙が零れ落ちる。

「変わらない…… 変わらない……」

さとするは石を運び終えると、薪割にはいった。

「変わらない、変わらない、変わらない」

気を失いそうになりながら、仕事をすべて終えて部屋に戻った。

「…… ちゃん。…… ちゃん」

またしても、同じ夢を見ていた。少女の声がこだまする。

さとするはすでに恐怖に震えていた。

「誰だ、帰ってくれ！ 帰れ！」

さとするは耳をふさいでしゃがんだが、声は脳に響くように続いていた。

「ねえ、あなたは、誰？」

「知らない！ そんなの知らない！」

「あなたは、誰？」

「うるさい！ どこかへいけ！ 帰れ！」

「帰りましょう。私とあなたのおうちに。お母さんとお父さんの元へ……」

目を覚ますと、錠が上がる音がした。

「僕は、誰だ……？」

夢つつつのままさとするはつぶやき、その直後はっとして起き上がった。

しかし、時すでに遅し。

さとするの体は見えない力で持ち上げられ、運ばれた。

空間が歪み、出口も入り口もない部屋に放り込まれる。

壁面すべてふさがれているのに、ほのかに部屋の中が見える。壁にはびっしりと、般若のように恐ろしい顔がならんでいて、全ての顔が呪文を唱えだした。

さとするは全身に痛みを感じ、首を絞められているように息苦しくなり、もうだめかというところで見えない手はゆるめられる。助か

ったと思うとすぐに苦しくなる。さとりは痛みと息苦しさの中にいた。

「くるしいっ！助けて！助けて……！」

その中でさとりは狂ったように叫び、絶叫が部屋に響き渡った。

さとりはとうとう気絶してしまった。

同時に、部屋を埋め尽くした顔が消えて、静寂が戻った。

静まり返る部屋の中、さとりになづく影があった。

『カイ……カイ……』

女は呼びかけながら、さとの頬をさわった。

『待ちくたびれた。早う、目を覚ましておくれ』

それだけをつぶやき女はどこかへ消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2008w/>

鬼の森

2011年10月10日03時27分発行